# 古代インドにおける東西文化の交流

## The interchange of Eastern and Western cultures in ancient India

本　多　至　成

### 1. Aśoka 王とギリシャ世界

古代インドの歴史上、東西世界の文化的交流に貢献した人物として、われわれはアショーカ王とギリシャ王ミリンダをあげることができよう。しかも、かの王たちの言動はともに、大乗仏教興起の因縁をうちに潜めているように筆者にはおもわれる。小論において、両王の活躍の背景と、その事績について概観することからはじめたいとおもう。

インド誌上におけるもっとも著名な王、アショーカはビンドウサーラ王のあとを嗣いで王位についた。アショーカ（Aśoka 在位 268～232 BC 頃）はチャンドラグプタ王の孫に当たる。マウリヤ王朝の絶頂期こそアショーカ王の時代であった。彼はインドの大地のほとんどを占有した。彼には多くの兄弟や姉妹がいてインドの諸都市に駐在させていた[1)]。アショーカはかっては非常に凶暴な王として Caṇḍāśoka「凶暴なるアショーカ」とよばれたが、即位灌頂後 9 年目にマガダ国から独立していた東南インドのカリンガ国（Kaliṅga）との戦争をきっかけに、慈悲の教えをとく仏教に帰依してからは Dharmāśoka「法のアショーカ」とよばれるのである[2)]。カリンガ国との戦いでは、約 15 万の捕虜と 10 万をはるかにこえる死者を出した。その死者の中にはシャモンやバラモンの死者も多数含まれていた[3)]。王自らこの事実を体験し悲しんだ。王はいっさいの戦いを放棄

し、これによって、マウリア王朝の征服拡大の動きは終焉をむかえた。王は即位後4年して、パータリプトラ城でみずから灌頂の式をあげたという[4]。そして、カリンガ征服後には平和と法の教化に邁進する。

法の教化とは、王が即位灌頂後7年に upāsaka（在家信者）として仏教の信者と名のって以降はじめての慈悲の実践であった。即位灌頂後10年には Saṃgha（僧団）において修行につとめ、その翌年には、仏さとりの地 Buddhagayā（ブッダガヤ）の菩提樹のもとに詣でた。

アショーカは「法の巡行」を開始して、仏ゆかりの霊場をめぐっている。かれは37年間王位にあって、タクシャシーラで逝去したとも伝えられる[5]。

ところで、アショーカの領土は広大なものであって、中村博士によれば、西はタクシャシーラを越えて、ギリシャ人の植民地に及ぶという。ギリシャ人の植民地は、その中心はアフガニスタンのアレクサンドレイアー（Kapiśa の西の Begram）あたりだという。カシュミールやネパールのカピラヴァスツ、またベンガルや南のマイソール州やマドラス州にまで彼の領有はおよんでいた[6]。

アショーカは自己の政治とその理想を民衆にひろげていくために、領土内に石柱を建てたり、摩崖の面を磨き、詔勅の文字をのこした。中村博士によれば、国境地方にのこされた摩崖詔勅は現在までに21発見されている。この中で、アフガニスタンの南のガンダハルの近くではギリシャ語とアラメア語で彫られたアショーカの詔勅文が1958年に発見された[7]。石柱詔勅も多く発見されたが、王はすべての人間はお互いに恩を受けているという報恩の思想が石柱にのべられている。これは仏教が説いている衆生の恩であり、政治はアショーカにとっては報恩の行となる。

## 2.「代受苦」と理想社会の実現（初期大乗仏教の利他的側面）

仏教は慈悲の精神を説く。仏教に帰依したアショーカは大国カリンガとの戦乱で悲惨の極みを体験した。そして、自らの政治理想を仏教の慈悲の精神に展開させようとしたのである。中村博士によれば、彼は当時インド

の人たちが遵守していた、祭祀や呪法を無意義なものとして、仏教への帰依をすすめたし、異民族の保護や囚人に対する恩赦の実行。無益の殺生、獣畜の去勢を禁止し動物たちを慈しんだ。この点で、つぎに述べるミリンダ王の慈愛の精神も同様であった。貧しい人たちには「施しの家」を建てた。人間、獣畜のための病院を設けて、諸方に薬草の栽培をおこなっている。このような救済の施設は、ヨーロッパの歴史では、コンスタンティヌス（306～337 A. D）の治世までは建設されなかったという[8]。

ところで、マウリア王朝（317～180 BC）開祖チャンドラグプタの妃はギリシャ人セレウコス王の王女である。マウリア王朝はそのつぎのビンドウサーラ王の時も、シリアおよびエジプトと交渉があった[9]。さらにマウリア王朝第三代目のアショーカはシリア、エジプト、マケドニア、キレーネー、エペイロスの五人のギリシャ系王に使者を送り、理想的な政治の在り方を伝達している[10]。アンチィオコス・テオス（Amtiokhas Theosu）シリア王、プットレマイオス（Ptolemaios Philadelphos）エジプト王、アンテイゴノス（Antigonos Gonatas）マケドニア王、マガス（Magas）キレーネー王、アレクサンドロス（Alexandros）エペイロス王など、こうしたギリシャ系の王たちに対しての使節の派遣は、アショーカのヘレニズム世界に対する重視を示す。この機縁を俟って、仏教の急速な西方への伝播が可能となったと考えてよい。

1958年には、アフガニスタン南部で、印欧語系のギリシャ語と非印欧語系北セム語族のアラメア語で書かれた、アショーカの詔勅が発見されている[11]。アショーカの幅広い交際が知られる。アショーカのときに第三結集がおこなわれて、ときの上座 Moggaliputta は辺境の地へ教えを伝えるために長老たちを各地へ派遣したという。ギリシャに関しては、パンジャーブ西部のアパランタカへはギリシャ人（Yona-ka）の Dhammarakkhita に*「火むらの譬えの経」*（*'Aggikhandhūpama-sutta'*）を伝えさせた。バクトリアへは、Maharakkhita を派遣して*「カーラカーラマ経」*（*'Kālakarama-sutta'*）を伝えさせている。それらの伝道は五人一組で派遣されたようである[12]。すでに、ギリシャの物語の中にインドに起源をもつものもあるという[13]。多くのギリシャ人が仏教に共感した理由

を中村博士は、「仏教がバラモン教とは異なって階級的民族的な差別を立てなかったことに由来するらしい。」といい、*'Milindapañhā'* の文を引用する[14]。

人が戒しめに安住して正しく注意するならば、サカ国でも、ギリシャでも、チーナでも、ヴィラータ（Virata 韃靼）でも、アレクサンドリアでも・・・涅槃を証する。

## 3. ギリシャ王ミリンダと仏教僧との問答『那先比丘経』(*'Milindapañhā'*)

紀元前2世紀の後半に西北インドから一時はインド中部まで領有し、支配権を確立していたバクトリア人の王 Milinda（＝Menandros）と、当時この地方において仏教の強権を誇っていた説一切有部（Sarvāstivāda）の僧で、仏教学の論師であった Nāgasena（那先）長老との仏教教義をめぐる問答集を「ミリンダ王の問い」*'Milindapañhā'* という。仏教の教理に関連した問答の結果、ついにギリシャの王である Milinda が出家者となり、アラカンの聖者となるという内容をもった物語である。内容がブッダの説いた経の形をとっていないので、パーリー聖典の三蔵の中にははいっておらない。ただし、ビルマ仏教では経蔵のうちの小部経典に入れている。ビルマ仏教は本書を非常に尊重しているという[15]。

パーリー語は固有の文字を持たないので、タイ、ビルマ、セイロンではそれぞれその国の文字をもって三蔵が出版された。インドでもデーヴァナーガリー文字による出版がされている。本書は、世紀前後のインドでのギリシャ的考え方と教養、仏教的思惟との対比という視点から見ても思想史的な重要性を持つ資料である。これによって、ギリシャよりインドに及ぶ紀元前2世紀ころの文化交流の一面を知り得る興味深い資料でもある。

とくに本書でとりあげられる問答は、煩瑣なアビダルマの問答の中でも、実践的な面を取り上げている点が注目される。それは初期大乗仏教興起のころとされている本経の成立史の問題にもかかわってくることを注目したい。インド文化圏の外にあるヘレニズム文化の中で育ったギリシャ王

が、仏教の学僧に対して鋭い質問を繰り返して、仏教を理解しようとするのである[16]。

## 4. 本書の内容

ところで、本書の内容は、パーリ語 *'Milindapañhā'* にはセイロン本とトレンクナー本とシャム本の3種類がある。このうち、シャム本はトレンクナー本よりも後代の増補修正ががくわえられて、トレンクナー本（V. Trenckner はデンマーク人。1924年に厖大なパーリ語辞典である *'A Critical Pali Dictionary'* の編集を始めている）にあるパーリ語としての美しさを欠く。

それぞれの成立にはそれぞれの発展段階が認められる。漢訳は『那先比丘経』とよばれるものがパーリ語 *'Milindapañhā'* に相当する。このパーリ語 *'Milindapañhā'* と漢訳『那先比丘経』との共通する部分の原形はもっとも古いという。中村元氏はその成立を、紀元前1世紀の半ば以前とみている。水野弘元氏は、パーリ文としてまとまった年代は1世紀前半か、それ以前という[17]。

早島鏡正氏によれば、Milinda 王に関する記憶が薄れないうちに、アビダルマ教学にくわしい仏教学者の手によって、西北インドあたりで編纂されたという。東西両人の会見の事実は、特異な事件として仏教の教団内でさまざまな伝説を産み出すこととなったであろう。『阿毘達磨倶舎釈論』（vol.22 大正 29・307・a 那伽斯那）や『雑宝蔵経』（vol.9 大正 4・492・c～493・a 那伽斯那。難陀王）に本経が引かれるのはその事実を示すものである。原語は混淆サンスクリット語で書かれ、のちにパーリ文に改変され、増広されたのは東部マガダ地方であったという[18]。

パーリ本の現在の形は3編に分かれている。

第一編　ミリンダとナーガセーナの前世物語を説く序論と、二人の三日間に及ぶ対話の結果、Milinda 王が Nāgasena 比丘の弟子となる話。

第二編　対話がさらに続き、仏教教理に関する難問を列挙する。

第三編　仏道修行者の守るべき徳目が比喩を用いて開説される部分。

高崎直道氏によれば、第一編がこの書の原形にあった部分と推定されるという。漢訳の『那先比丘経』はこの部分のみである。漢訳の全分量は、パーリ本の5分の1強である。

パーリ語原典

・V. Trenckner 校訂本（P. T. S. 1880　再版本は 1962）

〈英訳〉

・Miss I. B. Horner（P. T. S. 第1巻 1961）

〈和訳〉

・金森西俊『南伝大蔵経』59・上～59・下（シャム版昭和49年5月　大正新脩大蔵経刊行会）

・中村元・早島鏡正『ミリンダ王の問』3巻、東洋文庫、平凡社　1963–1964

第一編は2部分に分けられる。

1）王と長老の前生話そして　2）王と長老とが3日間の対話によって子弟の契りを結ぶ因縁についての部分である。ここには他に例の少ないまとまった論理が見られる。この第一編に問答体に張りがあって、古代の二大思想の対決にふさわしい雰囲気がある。倫理的徳目、形而上学、心理学から認識論まで多岐にわたる問答の根底を貫いているものは「アートマン」の否定、無我の論理である。ギリシャ的霊魂論と仏教の無我説との対決にある。

冒頭のナーガセーナを被験者としての名称、形態の問題、霊魂と身体、観念と実体の関係から認識の主体、輪廻の主体について言及していく。輪廻に関する時間の問題も大きなテーマとなっている。仏教の時間論が明解に示されていく。

第二編は王よりの仏教に対する詰問の部分である。この部分はむしろ教団内部で問題となっていたであろうことを想定させる。煩瑣な教義の問答で、この部分が後世の付加部分と考えられる。僧伽、教団の存続

の問題、仏陀観にも注目すべき見解がある。

第三編は修行者が遵守すべき徳目を比喩を中心に問答する内容となっている。この部分は在家の教化活動に有効な材料を提供したものと見られる。

本書の末尾によると、王が長老に発した問いは304あったというが、現在はそのうち236問が伝わっている。

この書が仏教が誕生したインド系ではなく、ギリシャ系の非仏教徒の立場から問い掛けがなされていることは、現代人にとっても親近感を持たせる。

漢訳で現存する経典としては『那先比丘経』が大正蔵経32巻目（国訳一切経「論集部」2，1934干潟竜祥訳）に収められるが、東晋時代の訳で、翻訳者の名前はわからない。この漢訳にはA本（2巻本）・B本（3巻本）とがあって、ともに同一の訳であったがA本は中央部分が欠けているし、文脈に混乱が見られる。B本は訳出後、加筆訂正した跡が見られるので原形に近いのはA本だと早島氏はいう[19]。翻訳が仏教の行われない辺鄙の地でなされたという。翻訳の時代を早島氏は、後漢時代おそくとも三国時代（4世紀）を下らない時という[20]。

*'Milindapañhā'* と『那先比丘経』との題名の違いからも、漢訳はパーリ文の系統とは別であろうし、阿毘達磨倶舎論や雑宝蔵経に引かれるものとも異なった系統であろうと干潟氏はいう[21]。

## 5. 古代ギリシャとインドとの交流

インドにギリシャ人が侵入したのは、アレクサンドロス大帝のインド侵略（BC 327）を最初とする。その後のインドはチャンドラグプタによりマウリヤ王朝が作られてギリシャの勢力は一時後退した。マウリヤ王朝にはアショーカ王が出てインドをほぼ統一した。このマウリヤ王朝の勢力圏に接して、ギリシャの勢力が存続していた。インドの西の地域はシリアのセレウコス王朝が統治していたが、紀元前3世紀の半ばに重要な二つの地方であるバクトリアとパルチアとがセレウコス帝国から離脱して、独立

の王国を建設した。これらのうちギリシャ系バクトリアの王となるのがミリンダ王であった。(このバクトリア国を漢訳では大夏とよぶ) ミリンダ王が西北インドを支配したのは BC 150 年ころである。ギリシャ文化がインドに定着したころである[22]。
ミリンダ王は、現存するインド文献では名前が確実に伝えられるギリシャ系の国王である。

## 6. ギリシャとインドの関係について

かつて J. ネールが E. R. ドッズ教授の言を引いて、「ギリシャ文化がこれ (インド文化・筆者註) に対抗して起こり、古典学者の頭脳の中を除いては、決してこれから完全に絶縁することのなかった東洋の背景」と言わしめた点、また古代ギリシャの思想が合理化という過程において、近代ヨーロッパ、アメリカの父となり、母となってしまったという指摘は注目すべきであろう[23]。

ネールは、古代ギリシャがその素晴らしい偉業、そのあとに続いた諸文化への影響、豊かな生活の日々などを除くと短命であったのは、あまりにも現在に熱中したためであるという。これに対してインドは宗教的、哲学的、瞑想的、形而上学的であって現世に無関心であって、「彼岸の夢」「来世の夢」に耽っている。インドの生気は、優しい人間性と変化に富みかつ寛容の文化、人生とその神秘的な道についての深い理解である。と語るところは注目したい。

ギリシャ文化は経験科学の端緒を開いた。これはギリシャ本土よりもアレキサンドリアのギリシャ世界でより豊かに発達した。とくに世紀前 330 年から世紀前 130 年までに至る 2 世紀の間は、科学の発展と機械の発明の記録においてめだっている。それは社会的発展と航海の要請が成し遂げたものであった。以下、中村元博士、早島鏡正博士、D, ヨング博士等の所説にしたがって、当時のインドと東方世界との交流史を鳥瞰する[24]。

D, ヨング博士によれば、このころ、ちょうどインドでは代数体系が確立し、0 記号の使用と位どりの記数法が使用された。男女の立場もインド

では一部、王族、貴族を除いては同等であった。結婚もギリシャでは契約上の事柄であったが、インドでは神聖な結合であるとみられた。

メガステーネスはパータリプトラの王（多分、アショーカ王の父であったビンドウサーラ王）がギリシャ王のアンチィオコス王に書面を送って「甘い酒と干した無花果と哲学者一人を買い求めて、自分の下に送るよう」に依頼したのに対して、アンチィオコス王は「ギリシャにおいては学者の売買は法律の禁ずるところである」と記している。

ギリシャとインドとは、歴史時代の最初期から相互に接触を持ち、後世に至っては、インドとギリシャ化された西アジアとの間に密接な接触があった。中央インドのウッジャイニー（現在のウッジャイン）の大天文台は、エジプトのアレキサンドリアと連携を持っていた。あるギリシャの書物によれば、数人のインドの学者がソクラテスを訪ねて彼に質問したという伝説が、記録されているという。またピタゴラス学派の学者たちによって教えられたほとんどすべての学説、宗教・哲学および数学に関するものは、世紀前6世紀にインドにおいて知られていたと H. G. ローリンソン教授は述べている。また、おそらく哲学者テユアーナのアポローニオスは、世紀の初めころ、西北インドのタクシラの大学を訪問したらしい。

尊像崇拝がギリシャからインドに伝わったというのは面白い考えである。初期の仏教は尊像崇拝に強く反対した。しかし、アフガニスタンおよび国境付近におけるギリシャ芸術の影響は強く次第にその勢いを拡大した。それでも、最初はブッダの彫像は造られず、もっぱら、ブッダの前世の化身と考えられた菩薩の、アポロに似た彫像があらわれた。これらの菩薩像に続いてブッダ自身の彫像や尊像があらわれた[25]。

・インドに関する最初の記録の一つは、ペルシャのアカイメネス（Achaemenid）王朝の支配者たちの碑文である。

B. C. 522～485 にわたって在位したダレイオス王（Dareios）は彼が統治した国の中に、ガダーラ（Gadara）とヒドウ（Hidu）の名をあげている。これは Gandhara とインダス渓谷のことである。これらの国々に対するペルシャ王国の支配は、アカイメネス王朝がアレクサンドロス大帝によって征服されるまで続いた。ペルシャ人は公用語としてア

ラム語を用いた。このアラム語のアルファベットはインドで用いられるようになってカローシュテイ（Kharoṣṭhī）文字として伝えられた。なぜにアラム語がカロシュテイ文字と呼ばれたかははっきりしていないが、恐らくは「驢馬の皮に書かれた文字」という意味であった。この文字はアカイメネス王朝の治世には既にインドで用いられていたに相違ない。カロシュテイ文字によるインド最古の碑文は、紀元前3世紀中葉よりはじまっている。

・アカイメネス王朝の帝王たちは、ほぼ2世紀にわたってインドの諸地域を統治しただけではなかった。彼らはキュロス（Cyros）がリュデアの王クロイソス（Croisos）を撃退したBC 546以降、小アジアのいくつかのギリシャ人植民地をも併合していたのである。だからアカイメネスの宮殿ではインド人とギリシャ人が互いに接触していたであろう。BC 519にはギリシャ人であったスキュラクス（Scylax）はダレイオス王の命を奉じて、インダス川の流れを探るためにインドへ派遣されたという。*（『ヘロドトス』4–44）* ギリシャ人の歴史家のひとりで、ヘロドトス（Herodotos）の先輩、ミレトスのヘカタイオス（Hecataios）はBC 500ころの人であるが、インドの地理やインド人について記す。インドについて記しているもう一人のギリシャ人は、アルタクセルクセス二世（Artaxerxes BC 404–358）の侍医であったクテシアス（Ctesias）であるが、彼は多くの寓話をのこしたことがフォテイオス（Photios）作品から知られる。

・インド遠征で知られているアレクサンドロスはアカイメネス王朝の最後の王、ダレイオス3世をB. C. 331年10月1日に撃退したのち、アレキサンドロスは、さらにアカイメネス王国の東部に向かって進撃をはじめて、326年インダス川を渡り、インドの王、ポロス（Poros）を撃退したが、やがて配下の兵士の進軍拒否にあってそれ以上の進軍をやめた。彼が征服したギリシャ人の国も、長くは支配下に置けなかった。

　アレキサンドロスはB. C. 323に没した。配下の将軍の最後はB. C. 317に西北インドを後にした。

・セレウコスイ1世ニカトールは（Seleucos 1 Nicator）は再度インドの

属州を征服せんとしたが、インドのマウリヤ（Maurya）孔雀王朝の創始者であったチャンドラグプタ（Candragupta）はこれらギリシャ人の侵略を斥けて、B. C. 305 にセレウコスは西インドと現在のアフガニスタンの大部分を、チャンドラグプタに明け渡した。このときの条約に「相互国際結婚の権利」がうたわれている。このことは BC 305 以降、ギリシャ人とインド人とが非常に密接な接触を持ったことを意味するし、インド人と同様にギリシャ人の側にも特定のカーストが与えられていたことを示す。メガステネスは両国の条約締結の使節の一人かもしれない。

・インドと接触を持ったのはここのギリシャ人だけではなくて、北アフリカのキュレネ（Cyrenaica）から追放され、ダレイオス王によってバクトリアに定住させられたギリシャ人の大集団もインドおよびインド人と交渉していた。古くからバクトリアナ（Bactriana）と称せられていたバクトリアの地は、オクソス（Oxos）川の上流（Amu Daria）に位置し、この地でインド人と接触をもったのである。バクトリアはヒンヅクシュ山脈により西北インドから切り離されていたが、カイバル（Khyber）など多くの峠によって交流がなされた。バクトリアに追放されたギリシャ人のことを、ヘロドトスは「金を掘り出す蟻」の物語が、古代作家たちにもっともよく流布した物語として記している。

> インド人は狐よりも大きな蟻たちから、砂漠で金を手に入れるという。この蟻たちは地面を掘り進むに従って、黄金の砂を掘り起こしてそれを積み上げていった。
>
> そして日中のもっとも熱いころに、熱は蟻たちを地中に追いやってインド人達は、袋をその黄金の砂でいっぱいにする。

ここでいうインドの黄金はシベリアのレナ川やアムール川で、上流の鉱山から運びだされた金の薄被であろう。

・アレクサンドロスのインド遠征とその影響とによって、インドとギリシャとの関係はより詳しい情報を提供することとなった。アカイメネス王朝の崩壊以後ギリシャ人についての情報はペルシャ政庁の公文書であった。ストラボン（Strabon）やプリニウス（Plinius）に引用されている

セレウコス王の配下にいた、ギリシャ人総督パトロクレス（Patrocles）の語るところでは、アレクサンドロスはインドのことについて精通していた人たちがもたらした記載を利用して、インドの事情に通じていたという。パトロクレスはこれらの記載を見ることができたのであろう。これらの記載を書いた人々は、征服者のギリシャ人に仕えることになったペルシャの役人たちであったのだろう。

・アレクサンドロスの遠征に従軍し、見聞した人のうち大帝の艦隊をインダス川河口からペルシャ湾に連れ戻したネアルコス（Nearchos）提督の書いたものがある。これはインドの地理を知る上で貴重である。二世紀の作家アリアノス（Arrianos）はその著『*インド誌*』（'*Indika*'）にネアルコスの作品を使用している。

・アレクサンドロスの遠征に参加し、その作品がストラボンなどの後世の作家に引用されている中の一人、オネシクリトス（Onesicritos）がある。彼が俗に「裸の哲学者」と称せられた人たちと対論しようとしたという報告は面白い。彼はこの対論に際して三人の通訳を雇わなければならなかったために、哲人たちの考えを十分理解できなかったという。これら「裸の哲人達」の一人は、ギリシャの哲人、ピュロン（Pyrrhon）に多大の感銘を与えた。ピュロンはアレクサンドロスの遠征に参加した学者のひとりであったアナクサルコス（Anaxarchos）に師事、随行した。

感銘を与えた物語とは、カラノス（Kalanos）というインド人の名は、ギリシャ人たちによってつけられた名前らしい。それは彼が人ごとに kale という言葉で挨拶していたからだといわれている。インド語の kale はギリシャ語の xaipeiv に相当するとプルタルコスの『*アレクサンドロスの生涯*』にも述べられている（Plutarchos, Alex. LXV）。プルタルコスによると、彼の本名はスピネス（Sphines）であったというが、インド語でいかなる意味かわからない。しかしのちになっても、ギリシャ人はインドの聖者が自殺するのを一度目撃する機会があった。ストラボン（XV. 1. 73）によると、アウグスタウス（Augustus）帝の許に派遣されたインド人の使節団の一行の中にはインド人のザルマノケガ

ス（Zarmanochegas）というものがいて、彼は腰布だけを身にまとった体に油を塗り、笑いながら葬送の薪の上に駆け上ったという。その灰は記念碑の中に納められ、記念碑の上には「ここにバルゴザ（Bargosa）出身のインド人、インドの古式に則って自らを不滅のものとしたザルマノケガス眠る」と刻されている。

## 7. メガステネスのインド誌

インドについて書かれた、古典作家たちの中で、最も大事なのはアレクサンドロス大帝のインド遠征後、久しからずしてインドを訪ねたメガステネス（Megasthenes）の書物の中に見られるからである。メガステネスの作品の伝承については、すくなくとも 15 人を下らない古典作家たちがその断片を伝えている。彼が書いた大部分が抄録とか引用の形で、のちの作家たちの書いたものの中に保存されているからである。のちの作家たちの中で最も重要なものは次の三人である。

A. シチリア島のディオドロス。紀元前 1 世紀の人で 40 巻よりなる『*歴史書*』（'*Bibliotheca historica*'）現在残るのは vol.1–5 と vol.11–20 までである。

この中に大帝のインド征服や、インドに関する論述がみられる。

B. アリアノス。彼はさきに述べたように『*インド誌*』（'*Indika*'）を著わし、アレクサンドロス大帝の遠征に関して『*アレクサンドロス出征記*』（'*Anabasis Alexandri*'）を著わしている。この書を書くために、彼は大帝の将官の一人であったアリストブロス（Aristoboulos）や、同じく将官の一人で、後に BC 305 にはエジプトの王となったプトレマイオス（Ptolemaios）の著述を利用している。

C. ストラボン（BC 54–AD 19）。彼は有名なギリシャの地理学者で『*地理書*』（'*Geographica*'）を著わしている。ストラボンによれば、メガステネスのいうことには信頼は置けないという。ストラボンはメガステネスがインド王のサンドラコットス（Sandrakottos）のもとへ使者として派遣されたという。ストラボンによるとインドについて

記しているデイマコス（Deimachos 彼にも *'Indika'『インド誌』*の作品があったという）という人物もまた使者としてパリムボトラ（Palimbothra）のインド王のサンドラコットスの息子であるアリトロカデス（Allitrochades）の許へ派遣されたという。デイマコスが派遣されたインド王アリトロカデスのサンスクリットは、アミトラガータ（Amitraghata　敵を殺すもの）に相当する。他方、メガステネスが派遣されたインド王サンドラコットスは、チャンドラグプタの後継者でインド史からいうと、ビンドウサーラ（Bindusara）ということになる。

メガステネスがチャンドラグプタ王の首都、パータリプトラ（Pataliputra）にどれほど滞在したかなどについては不詳である。アリアノスによれば、メガステネスは、インドに境を接していたアラコシア（Arachosia）駐在の地方長官シビルテイオス（Sibyrtios BC 323 に地方長官に任命される）のもとに逗留して、そこからインド王サンドラコットスの許へ赴いたという。

ストラボンの引用によって、メガステネスのインド見聞録を開いてみると、インドの地理・動物・部族・カースト・行政機構・哲人・風俗・宗教など実にゆたかである。彼は宮廷にいた。興味深い説明がある。

王の身体の世話は婦人たちにまかされている。彼女たちはその両親のもとより購われた。護衛兵や兵士たちは入口の外側に伺候している。酒に酔った王を殺した女は、次期の王の妻となるが概して息子たちが父の後を継ぐことになっている。王は日中眠ってはならない。そして夜になると王は次々に寝台を変えていかなければならない。暗殺計画を払うためである。王が王宮を後にするのは戦時だけではない。彼は裁判沙汰のために王宮の外に出る。そのようなときに王は仕事の中断を許すことなく、一日中法廷にいることになる。王はどうしても自分で行かなければならない時、すなわち彼は木でできた円筒形のもので按摩されなければならない時間がきても、法廷を去ることはできなかった。王は四人の侍者によって按摩されな

がらも訴訟に耳を傾けている。

もう一つ、王が王宮を後にするのは、祭式を執り行う時であり、第三には王がバッコッスの祭典の流儀で狩猟に出る時である。すなわち、夫人の群れが王を取り巻き、その周りには槍を手にした兵士たちが配置されている。行幸路は縄で印がつけられて、立ち入り禁止となる。これを侵すものは男女を問わず死刑に処せられる。太鼓やどらを手にした男たちがろぼを先導する。王は一定の囲いの中で狩猟し、台座から矢をはなつことになっている。彼の側には二三人の武装した夫人が侍っている。でも王がもっと自由に野外で狩猟する時には、彼は象に乗って矢を放つ。婦人たちのあるものは車に乗り、またあるものは馬や象にも乗っている。そして彼女たちはあたかも遠征に出かけるかのように各種、各様の武器を身につけている。

メガステネスのこの記載は、彼のインド滞在中の観察にもとづいており、ほとんどインド側の文献資料の記載するところと合致している。この資料の詳細な研究はオランダの学者バーバラ・テイマー（Barbara Timmer）などによってなされている。ところでメガステネスがバラモンの四住期を説く中で、（師家について勉学する学生期・結婚して社会生活をする家長期・森に遁世してく行にいそしむ林棲期・乞食に露命をつなぐ遊行期）第三の林棲期に彼は森に入って苦行者の生活をしてウパニシャドを学び、祭式を行う。メガステネスはいう。「もっとも尊敬されている人々は vanaprastha（林棲者）とよばれている。彼らは森の中にすみ、木の葉や、野生の木の実を食べ、木の皮で作った衣をまとっている。彼らは性の交わりと飲酒を慎んでいる。王が使者を派遣して物事の由来に関し、彼らに相談を持ちかけると、彼ら苦行者はそれに答える。また王は彼らを媒介として神々をまつり、祈念する」と。ここに、問答のポイントが示される。

この時代のインド社会を描く文献が、インドには存在しない。『ダルマ

・シャーストラ』（*'Dharmaśāstra' 法典*）などはインド社会の理想的姿を説いており、現実論に遠い。また1909に発見された『アルタ・シャーストラ』（*Arthaśāstra*）はチャンドラグプタ王の宰相の作と言われたが、その成立には問題が多いことがしめされている。

諸先哲の研究を中心に、古代インドの事績がどのようにして東方世界とかかわっていったかをまとめてみた。

## 註

1）『大史』第五章『大唐西域記』第八巻　中村元「アショーカ王詔勅」（『仏教教育宝典』「仏陀・大乗仏教集」1所収 p.p.232–280　玉川大学出版部（以下、「玉川本」と略す。）昭和58年6月刊）
2）『大史』第五章　188 f　中村元「アショーカ王詔勅　解題」（上記「アショーカ王詔勅」所収 p.p.225–231）
3）摩崖詔勅　第13章「玉川本」p.245
4）『大史』第五章22
5）『大史』第二〇章1　f V. Smith: 'Oxford History of India', p.116
6）『インドとギリシャとの思想交流』（「中村元選集」第16巻　春秋社　昭和43年　p.420）
7）上記、「中村元選集」第16巻　p.548
8）上記、「中村元選集」第16巻　p.553
9）中村元『エジプト古代史』上　p.402, p.410, p.413
10）摩崖詔勅　第13章　上記「中村元選集」第16巻　p.130「玉川本」p.245
11）塚本啓祥『金倉博士古稀記念論文集』p.p.153～166　塚本啓祥「Kandahar出土のアショーカ法勅」（『法華文化研究』第2号　法華文化研究所　昭和51年3月）p.p.34–44
12）『大史』十二章　p.1『島史』8巻　p.1『善見律毘婆沙論』2巻（大正24・684・）上記、「中村元選集」第16巻　p.125
13）A. B. Keith, JRAS. 1915, p.784　上記、「中村元選集」第16巻　p.127
14）'Milindapañho' ed. by V. Trenckner, p.327 上記、「中村元選集」第16巻　p.127
15）早島鏡正『新・仏典解題辞典』1966年9月春秋社刊　p.p.76–77　中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い』3　平凡社　2007年3月刊　p.324）
16）金倉圓照『印度中世精神史』中　昭和37年　p.p.137–195
中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い』1–3　昭和38–39年

中村元『インドとギリシャとの思想交流』昭和 43 年
金倉圓照・塚本啓祥訳注『G ウッドコック・古代インドとギリシャ文化』昭和 47 年
塚本啓祥「Kandahar 出土のアショーカ法勅（その二）－アショーカのギリシャ人対策に関連して－」（『日本印度学仏教学研究』18-1　昭和 44 年 12 月　p.p.29-36）'Milinda-tīka' Review of P. S. Jaini（ed.）PTS, 1961 BSOAS, XXV（1962）p.p.375-376
早島鏡正『初期仏教と社会生活』岩波書店
ドウ・ヨング（1921 オランダ生まれ、ライデン大学　オーストラリア大学 'Indo-Iranian Journal' の創設者）『インド文化研究史論集』塚本啓祥訳（平楽寺書店　1986. 7 p.p.201-248）

17）早島鏡正解説、『新・仏典解題辞典』p.76.b
18）中村元・山田統編『世界思想教養辞典』東京堂出版　昭和 48 年 3 月 p.462
19）早島鏡正解説、『新・仏典解題辞典』p.76-b
高崎直道『インド思想論』（法蔵館　1991. 6 pp.231-401）
20）先掲「新・仏典解題事典」p.77-a
21）干潟龍祥、「国訳一切経解題」（論集部 2 p.p.1-3　昭和 9 年大東出版社）
22）中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い』3 平凡社　2007 年 3 月刊 p.327
23）J, Nehru 'The Discovery of India'『インドの発見』上、辻直四郎他訳、岩波書店刊、昭和 34 年 8 月　p.193 以下
24）中村元『インドとギリシャとの思想交流』昭和 43 年　p.115 以下
ドウ・ヨング『インド文化研究史論集』（塚本啓祥訳　1986 年 7 月刊 平楽寺書店）
25）ドウ・ヨング『インド文化研究史論集』（塚本啓祥訳　1986 年 7 月刊 平楽寺書店「第三部　ギリシャ人によるインドの発見」p.p.203-248）
高崎直道『インド思想論』（法蔵館　1991. 6 pp.201-221）
定方晟『空と無我』（講談社　1990. 5 p.p.34-48）他